

2006・11・13finalized

血液浄化にみる日本的曖昧な文化

板橋中央総合病院血液浄化療法センター

阿岸鉄三

物理化学的現象に基づく血液浄化は、通常、きわめて科学的な取り扱いをしていると考えられているが、意外にも、曖昧な要素を抱えている。たとえば、慢性腎不全に対する血液透析は、最も汎用される血液浄化であるが、近接の血液濾過・血液透析濾過などとは拡散・濾過の強弱の差による相互移行型であるのに、線引きがないまままったく別物に扱われている。LDL 吸着・endotoxin 吸着など、現在は、病因論的に無意味と考えられる呼び名もそのままである。しかし、逆に特異的病因(関連)物質除去より非特異的除去が臨床的に効果的と考えられる場合もある。考えるに、生と死すら、日本では特に意外と曖昧に扱われている。新しい生命の誕生というが、生命は新しくは作られない。生命は、継承されるだけである。生命のないところに、新しい生命はできない。哺乳動物で、生命の継承の厳密な時刻は、受精したとき・胎児の心拍開始のときなど、定かではない。生前・生後・死後はあっても、死前はない。そして、生前・生後・死後は時間的経過としては、対称形ではない。告知をするようにいわれても、日本人には、死の時期は曖昧な方が心落ち着くのである。生物学的、すなわち科学的生・死が明らかでないのに、哲学的・宗教的・倫理的生・死がさらに問題を一層複雑にしている。